

## 留学生の書道体験における気づき — 書字への意識と書表現の捉え方 —

林 朝 子

### A Study on the Awareness on the First Experience of Calligraphy by Foreign Students: About Writing Kanji and the Perception of Calligraphy

HAYASHI Asako

#### 〈Abstract〉

We provided foreign students the opportunity of calligraphy. In the activity, they tried to write Kanji by using brush and to appreciate the works of calligraphy. Through the activity, foreign students 1) can have consciousness of details on writing Kanji, for example, the way of writing basic lines, the shape and size of Kanji against the paper and so on, and 2) can perceive calligraphy both as language form and as an appreciation of design. Based on these two points, calligraphy is so useful for the way of teaching and learning letters and is enjoyable art for foreign students.

キーワード：書道 留学生 書字 文字性と造形性

#### はじめに

本実践では、書道経験のない留学生を対象に、1. 毛筆で漢字を書くこと、2. 書作品の鑑賞を実施した。この2つの活動を通して、「毛筆で書くことと書字能力の向上の関連」「書表現の文字性と造形性の捉え方」を明らかにすることを目指した。

留学生を対象とした書教育の多くは本実践のように短期あるいは短時間で行われる体験型であり、長期的なものは非常に少ない。書道体験を通して留学生の文字や書に対してどのような気づきがあるのかを明確にすることで、国内外の日本語教育において、文字指導の一方法として書教育が担え得る点、また、書教育そのものの可能性について考える一助にしたい。

#### 1. 先行研究と本実践の位置づけ

##### 1-1. 非漢字圏における書教育

高濱（1996）では、日本に関する研究を行っている米国の高等教育機関（169 機関）を対象に質問紙法にて調査を行い、有効回答とされる 18 機関（19 講義）で実施されている

書教育の事例を分析し、米国での書教育の目的と背景を考察している。その結果、「外国語教育に関連する教育目的」として、以下の 3 点を取り上げている。

- [A] 言語教育との関連：「書写技能の修得」と「文字の正否・良否・適否を認識できる弁別能力の修得」
- [B] 芸術文化の教育との関連：「書の芸術性の含蓄的理解（感性的理解と知的理解を合わせたもの）」
- [C] 異文化理解教育との関連：「『書』や手書き文字に対して日本または中国の国民一般が有する価値観の理解（内面化）」「当該国民一般が有する芸術観の理解（内面化）」<sup>1)</sup>

高濱（1996）では、米国の高等教育機関において「講義」として書道に関連する内容が開講されていることが明らかにされた。特に、[A] は書表現の文字性に大きく関わる観点であり、正字として、正しく読める文字を書くための書字能力につながることを目的にしているであろう。非漢字圏という日常的に漢字に触れない文化圏において、毛筆を使用することで文字への意識が高まると考えられている背景がうかがえる。[B]「書の芸術性」、[C]「価値観、芸術観」については、明記されていないが、書表現の持つ文字性と造形性を含めた「芸術性」「価値観・芸術観」であると考えられる。

## 1-2. 長期留学生に対する書教育

福光（2005）は、半年から 1 年という長期開講授業の実践である。授業の目標として以下の 4 点が挙げられている（下線は筆者による）。

1. 筆を使って墨書することに慣れ親しむ。
2. 日常の文字を正しく美しい形で書くことができるように練習する。
3. 書道史を通して書体成立の変遷を学び、文字に対する理解・関心を高める。
4. 自らの書作品を創り、また鑑賞することを通して書道の芸術性を理解し、さらに、それを各自の言葉で話すことができるようになる。

2. 「日常の文字を正しく美しい形で書く」ことは「書字能力の向上」に当てはまるものがある。3. 「書体成立の変性」で様々な書体や書風に触れることから、「文字に対する理解・関心」では、文字の文字性だけでなく、造形性にも意識をむけることを目標としているであろう。4. 「自らの書作品を創り、また鑑賞」では、文字性と造形性に富んだ創作や作品鑑賞を意味し、「書道の芸術性」の深化を目指している。

福光（2005）では、留学生の書道への感想も多く挙げられており、授業の目標で挙げられた内容について、留学生の意識の中で具体化されていることが明示されている。

また、福光は福光（2005）の実践内容を基に、『留学生のための書道〈入門篇〉』として教材化している。本稿での実践においても、指導法や説明方法等を参考にしている。<sup>2)</sup>

### 1-3. 日本語未学習留学生への書教育

田畑（2013）では、ドイツ人高校生（交換留学生）14名と引率教員2名を対象<sup>3)</sup>に100分の「日本文化としての書道の体験学習」を実施し、留学生が書道の文字性と造形性をどのように捉えているかを考察している。その結果、「書かれる文字の意味を理解できない、もしくはその理解が浅い場合、また、文字の意味が理解できていても文字とそれが意味する内容の密着性が低いという」理由から、「留学生による書道の表現は、文字性よりも造形性に意識が働く」としている。この点が、「言語の理解の限界を持つ留学生にとって、日本語の学習としてではない、直截に書道を理解する手助けになる」と考えており、文字性だけにとらわれない書道のあり方を提示している。

## 2. 実践内容

本実践の流れを示す。

実施月日：2016年12月13日 13：30～15：30

実施場所：総合研究棟Ⅱ・2階ロビー

参加者：三重大学留学生13名（アンケート回収は12名）

書道経験：10名未経験、1名3回経験、1名母国中国で幼少時学習

実際に書作品を見た経験：9名有り、3名無し

書道知識：日本に書道がある：12名知識あり、中国に書道がある：11名知識あり、1名知識無し

日本語レベル：2名初級、4名初中級、4名中級、2名上級

出身地：3名中国、2名インドネシア、1名ウクライナ、1名台湾、1名ネパール、1名ブルネイ、1名ベトナム、2名不明（非漢字圏）

実践目標：筆で書きたい漢字をカレンダーに書く

実践内容：13：30～13：45 説明（目標、予定、書道具の説明）

13：45～14：15 基本練習（基本点画の練習）

14：15～14：50 漢字練習（各自書きたい漢字1文字、楷書手本あり）

14：50～15：10 カレンダーに書く（上記で練習した漢字）

### 15：10～15：30 アンケート記入

アンケート回収できた 12 名の中には長期にわたり書道学習経験者が 1 名（中国人留学生）いた。本稿での分析においては、未経験者あるいはほとんど経験のない留学生を対象にするため、この学生のアンケート回答は含めず、11 名を分析対象とする。日本語レベルは様々であるが、日本語学習は本学において継続しており、既習漢字数には差があるが、文字としての漢字の理解はできてる。

実践では、パワーポイント、配布資料（パワーポイントのスライドを印刷したもの）、実物投影機を使用した。口頭での説明には、英語と日本語を使用した。英語による説明の際には、1. で取り上げた『留学生のための書道〈入門篇〉』の表現を参考にした。なお、支援者として、書道経験者の大学院生 2 名（中国人）、学部 4 年生 2 名（日本人）が入り、参加者の様子を見ながら支援をしてもらった。

では、活動内容を詳細に見ていく。【説明】の書道具の説明では、まず、「筆、墨、硯、紙、下敷き、文鎮」を取り上げたが、墨を擦る十分な時間がないため墨液の使用、プラスチック製硯の使用、紙のなめらかな面を使用の 3 点についても留意した。筆の持ち方については、単鉤法（一本がけ）と双鉤法（二本がけ）をスライドで示すと同時に、実物投影機でも実際に示した。

【基本練習】では、光村図書『中学書写』を参考に、漢字を構築する 9 種類（「はね」を含む）の基本点画を取り上げた。プリントでも配布したが、実際に投影機で一つ一つの点画を書いて見せるようにした。福光（2005）で「彼らは書かれたものを見るのではなく、指導者が書いているのを直接に見るということに関しては大変熱心である。またそこからかなりの情報を得ている。」と述べられているように、本実践でもスクリーンに映った筆の動きや角度など細かな点にまで意識が向けられている様子が見られた。また、練習の際には、各点画が実際にどのような漢字で使用されているかを確認しながら進めた<sup>4)</sup>。【基本練習】は次で述べる【漢字練習】、そして【カレンダーに書く】で行う作品の創作につながっているという流れになっている点も参加者に伝えた。

【漢字練習】では、各自が事前に選んだ漢字を取り上げた。実践の 5 日前までに書きたい漢字を選ぶよう指示し、筆者が書いた楷書の作品例も配布した。

【カレンダーに書く】では、2017 年度のカレンダーが印刷された書道用紙に【漢字練習】で練習した漢字を書いた。紙は 1 枚のみ配布した。最後に筆者が「翠」を押印し、作品として完成させた。名前の記入は必須としなかった。

【アンケート記入】では、自由記述式・選択式のアンケートを行った。できる限り詳細な記述を求めたため、記述の際には、日本語・英語・中国語の使用を可とし、実際に日本

語、英語、中国語の3言語の使用が見られた。なお、3.以降でアンケートの記述内容を記す際には、記述内容の最後に(日)(英)(中)と記し、(日)の場合は回答のまま、(英)は筆者、(中)は筆者と母国語話者が翻訳したものを記す。

### 3. アンケート結果・分析と考察

では、11名のアンケート結果を基に、「毛筆で書くことと書字能力の向上の関連」「書表現の文字性と造形性の捉え方」の2つの観点から分析と考察を行う。

#### 3-1. 毛筆で書くことと書字能力の向上の関連

「基本練習」、「漢字練習」は11名全員が「楽しかった」と回答している。書道そのものについては、「難しかった」6名、「少し難しかった」5名であったが、留学生の書道に取り組む姿勢からは、スクリーンに写した筆の動きを各自が表現しようと各自が何度も練習を重ねる様子が見て取れ、難しいながらも楽しく点画や文字を書こうとしていることが窺われた。筆と墨という初めての用具用材を用いて点画や漢字を書くことにより、一つ一つの点画に集中することになり、漢字を構築する点画やその書き方への注意が喚起されたと考えられる。

「カレンダーに書く」ことに関しても、11名が「楽しかった」と回答している。書く用紙は1枚しかなく、かなり緊張しながら書いている留学生もいた。実際にカレンダーを見ての感想の中には、「練習の時に書いた漢字のほうがもっとよかった(日)」と記している者もいた。一方で、「私を書きたいように完成できたのでうれしく思う(英)」「下手の作品でもおもしろい(日)」「かなり満足したがもっと上達したい(英)」といった自身の作品として満足している回答もあった。

「カレンダーの漢字の形」は「よかった」5名、「少しよかった」3名、あまりよくなかった」4名であった。漢字の形に関しては、筆で大きく書くことで目立ってしまう部分もあるが、一方で字形について意識を向けるきっかけにもなっている。「カレンダーの漢字の大きさ」は「よかった」6名、「少しよかった」3名、「あまりよくなかった」2名であり、紙面と文字の大きさについても、各自がイメージする適度な大きさを意識していると言える。「カレンダーの漢字の太さ」は、「よかった」5名、「少しよかった」4名、「あまりよくなかった」2名であった。点画の太さは漢字の大きさとも関連するが、使い慣れない筆による調節は多少の困難を感じたようである。点画の太さに変化をつけるのに必要な筆圧の調節が難しく、思った以上に極端に太細が出てしまった参加者もいたようであるが、基本練習、漢字練習の段階で筆圧の調節はある程度は感覚として捉えられてはいたであろう。「カレンダーの漢字の配置」については、「よかった」5名、「少しよかった」5名、「あま

りよくなかった」2名であった。配置についても「大きさ」「太さ」とも関連するが、各自が紙面に対して漢字をどのように配置したいか、作品の全体像を考えながら、漢字を書いていることが読み取れる。

「カレンダーの漢字の筆順」については、「気にした」3名、「少し気にした」6名、「あまり気にしなかった」2名という回答であった。2名の留学生からは、筆順についての質問を受けた(「飛」と「愛」)。他の留学生の漢字を書く様子を見ていたが、基本的な筆順を用いていた。しかし、今回の実践で書いた漢字については、十分に筆順を知っている漢字である可能性もある。また、普段から漢字を書く際にどの程度筆順に意識を向けているのかも調査ができておらず、筆順への意識や実際に筆順に沿って書いているのかどうかについては今後さらに調査が必要である。

「カレンダーをどうするか」については、「自分の部屋にはる」10名、「家族にあげる」1名という回答であった。「自分の部屋にはる」ことで、日常的にその漢字を見ることが考えられ、漢字の形、大きさ、配置などに意識が向け続けられるであろう。今回取り上げた漢字だけではなく、漢字という文字そのものへの意識の深まりにもつながると推測される。

「カレンダーの漢字を書く時、漢字の例はよく見たか」は、「見た」7名、「少し見た」4名であった。福光(2005)では、留学生は「手本」(本実践では「作品例」に当たる)を「練習の初段階においては(中略)詳細に見ようとする」が、概ね留学生は「手本」を見ようとする姿勢が「希薄」であると述べられている。本実践では、書道体験がない・ほとんどない留学生を対象としたため、見ている度合いに違いはあるにせよ、全員が作品例を「見た」と考えられる。書字能力向上のための一方法として書道(筆で書くこと)を考えた場合、文字の導入時に一時的であっても「手本」「作品例」を見る動作をすることで、字形や点画の位置等に意識を向けられ、書字の際に反映されるであろう。

3-1. では、「毛筆で書くことと書字能力の向上への関連」の観点から、アンケート結果の分析と考察を行った。基本点画や漢字の練習、カレンダー作品創作という流れの中で、書字に必要な基本点画の書き方を学習後に各自が選んだ漢字を書くことで、基本点画の重要性が増し、カレンダー作品では字形、紙面に対する漢字の大きさ、線の太さ、配置、筆順など、書字の際に注意すべき点を意識しながら書いていたと言えるであろう。高濱(1969)、福光(2005)でも指摘されていたように、本実践でも毛筆を使用することが書字能力の向上の一助となることが示された。さらに、本実践では、「基本点画→漢字の練習→カレンダー作品創作」という流れを明確に設定することによって、基本点画が自分が選んだ漢字のどの部分に使用されているのかをイメージしながら練習することができ、より1つ1つの点画の書き方に意識を向けた練習ができたと考えられる。



### 3-2. 書表現の文字性と造形性の捉え方

留学生が選んだ漢字とその理由、書道作品の鑑賞の結果を基に、留学生の書道の文字性と造形性の捉え方について考えていく。

#### 3-2-1. 留学生が選んだ漢字とその理由の分析と考察

まず、留学生が選んだ漢字とその理由は表1である（下線は筆者による）。

表1 留学生が選んだ漢字と理由

漢字	選んだ理由
1) 林	<u>名前</u> にある一つの漢字だから（日）
2) 愛	愛があれば世界はより幸せになるという思いから（英）
3) 宋	<u>名前</u> だから（日）
4) 愛	愛は大切だから（英）
5) 愛	来年が愛でいっぱいの平和な年になることを祈って（英）
6) 夢	「夢」は私たちが生きるモチベーションになるものだから（英）
7) 嵐	「嵐」というアイドルグループが好きだから（日）
8) 笑	いつも笑って、幸せに過ごしたいから（英）
9) 光	私の <u>名前の意味</u> は日本語では「光」だから（英）
10) 愛	「 <u>心</u> 」という漢字が好きだがシンプルなので、「愛」にした（英）
11) 飛	私にとって留学はすごく大事なことで来年も（いろんな意味で）飛びたい（日）

「愛」が4名、その他の漢字は1名ずつである。理由を見ていくと、1) 3) 7) 9) が自分の名前に関係がある漢字や、好きなアイドルグループの名前である漢字を選んでいる。また、2)、4)～6)、8)、11)は、自身の気持ちと一致する意味の漢字を選んでいる。これらの理由は、意味のある文字としてそれぞれの漢字を選んでおり、文字として意味が伝わる形として書こうとしていると言えるだろう。

一方で、10)「愛」の理由は、「心」という漢字が好きだがシンプルなので、「愛」にしている。「心」を書きたいと思った理由は、自身の気持ちや漢字の意味からと推察できるが、それよりも文字として「シンプル」すぎるために「愛」を選んだという点に注目したい。漢字の持つ意味よりも、筆で書いて表現した場合の点画の少なさからくるシンプルさが気になり、「心」が入っている「愛」を選んでいる。これは、文字性よりも造形性に注意が向いており、漢字の意味は十分に理解できている場合でも、造形性に意識が働く可能性が示唆できる。

### 3-2-2. 留学生の書道作品鑑賞の結果の分析と考察

次に留学生の書道作品の鑑賞について見ていくこととする。

このアンケートでは、日本の現代作家の書（昭和から平成にかけて発表された作品）11 作品 A～K を対象とし、直観的に「いいな」と感じる作品に順位を付けて 2 つ選び記号で記し、そう感じた理由をそれぞれ記述させた。これらの作品は全て東京書籍『書道 III』に創作例として掲載されている作品である<sup>5)</sup>。作品は A3 用紙にカラー印刷したものであり、実際の作品をかなり縮小したものである。作品の詳細とアンケート回答結果を表 2 に示す（下線は筆者による）。

〔○名・○名〕は〔1 番目に選んだ人数・2 番目に選んだ人数〕を記し、( ) 内は筆者が補足した内容である。なお、1 名回答がなかったため、合計 10 名の回答を対象とする。

表 2 書道作品の鑑賞作品

作品	作家名	作品解説 <sup>6)</sup>	留学生 (順位)	
			1 番目	2 番目
A	西川寧	六朝風楷書を基盤とし、点画の端々まで力を充実させた作品。	〔2 名〕 ・よく書けていて、運筆も強そうだ。(英) ・ <u>はっきりと読める。</u> (英)	〔2 名〕 ・筆者の心情的なものが表れているが、思うままに書かれているのではない。自由に書かれているようであるが、 <u>形が崩れているわけではない。</u> (日) ・ <u>はっきり書かれていて、何かを語っているよう</u> だ。(英)
B	赤羽雲庭	自然な用筆で運筆に無理がなく、素朴で気宇の雄大な作品。	〔0 名〕	〔0 名〕
C	手島右卿	象形文字（篆書）を淡墨の潤筆と渴筆で、大胆に表現した迫力にあふれた作品。	〔0 名〕	〔1 名〕 ・ <u>山水画のよう</u> で好きだ。(中) ・ <u>古い漢字なの動物なのか</u> わからないが、とても好奇心をそられる。(英)
D	村上三島	すっきりした透明感のある線を主にした、明るい、上品な作品で、良寛の書を彷彿とさせる。	〔1 名〕 ・漢字をぜんぜん読めないですけど、なぜかとても魅力的です。 <u>ビジュアル的に一番キレイだ</u> と思います。こんなやわらかい線がいいです。(日)	〔1 名〕 ・とても興味深い。読んだり書いたりするの <u>に書道の技能が必要</u> そう。(英)



記号	作家名	作品解説 <sup>6)</sup>	留学生（順位）	
			1 番目	2 番目
E	松本芳翠	形の整った作品で、線を引き締め、細部にも注意を払った、安定感のある作品。	〔4 名〕 ・崩されていない <u>正確な</u> 字であり、柔らかさも感じる字である。(中) ・美しい。(英) ・漢字がすごくきれいに書いてある。(日) ・意味はわからないが、何か気になる意味のある文章が書かれていると思う。(英)	〔2 名〕 ・他の作品よりより <u>シンプル</u> である。(英) ・読みやすく <u>力強い漢字</u> です。(日)
F	松井如流	構えの大きい一字書。大きく運腕し、懐の広い、包み込むような豊かさを表現した作品。	〔1 名〕 ・ <u>鳥の絵</u> が美しい。(英)	〔2 名〕 ・ユニークだ。 <u>このような形の鳥</u> が好き。(英)
G	鈴木翠軒	やや細身の線で淡墨を用い、自在に運筆した、動きの大きな作品。潤滑の変化に工夫がなされている。	〔0 名〕	〔2 名〕 ・ <u>見にくい</u> ですけど、とても <u>かっこいい</u> と思う。(日) ・美しい。(英)
H	青山杉雨	一点一画の線の変化が多彩で、金文造形のおもしろさを発揮した作品。小字の落款も作品を引き締めている。	〔0 名〕	〔0 名〕
I	上田桑鳩	紙面の下方に一字を配し、周りの余白を生かした作品。線の響きと空間のバランスが特徴的である。「品」を書いて、題名を「愛」とし、話題を呼んだ。 <sup>7)</sup>	〔1 名〕 ・私は家に帰りたい。 この写真は家のように、幸せな家族を表している。(英)	〔0 名〕
J	栗原蘆水	一本一本の線に表情を加えて、点画に変化を追究している。線の厚味を生かした作品。	〔1 名〕 ・構成が整っていて、しっかりしている。 <u>文字がはっきり</u> している。(日)	〔0 名〕
K	小坂奇石	字形の変化に工夫を凝らし、ゆったりとした余白の美しさと大きさが感じられる作品。	〔0 名〕	〔0 名〕

まず、A、E、J の作品について見ていきたい。A は〔2 名・2 名〕、E は〔4 名・2 名〕、J は〔1 名・0 名〕が選んだ。A は多数字作品であるが、楷書であり、一字一字が独立している。E は 9 字の楷書作品である。J は行草書作品であるが、文字と文字の連綿はなく、一字一字が独立している。まず、A と E は、それぞれ合計で 4 名、6 名の留学生が選んでおり、半数を占める。これらの作品を選んだ理由には、一字一字が独立していることから「はっきり読める／書かれている」という記述や、「形」「正確な字」「シンプル（他の字は連綿など表現が複雑なのに対して）」「漢字」といった「字」として見ている記述が見られた。J についても「文字」という記述があった。これらの 3 作品は一字一字が明確に漢字・文字であることが把握できることから、文字性に関する記述が見られたのだろう。日本語の知識を持つ／日本語を学ぶ留学生は、たとえ読めない、意味がわからない場合でも、文字性から書作品を見る傾向があると伺える。

では、次に C、D、F、G、I について見ていく。C は〔0 名・1 名〕、D は〔1 名・1 名〕、F は〔1 名・2 名〕、G は〔0 名・2 名〕、I は〔1 名・0 名〕であった。まず、C、D、F、G を選んだ理由を見てみると、「C：山水画のよう／古い漢字か動物なのかわからない」「D：ビジュアル的にきれい／書道の技能が必要そう」「F：鳥の絵／このような形の鳥が好き」「G：見にくい（文字として読めない）」という記述が見られた。これらの記述は、「漢字」「文字」として作品を見ているのではなく、作品に書かれているのは文字であるという前提はあるものの、その色の濃淡、線や形の変化などを楽しんでいることがわかる。「D：書道の技能が必要そう」は、G は草書で運筆の大きい筆脈を感じ取れる作品であり、筆脈の流れを感じ取ったことから「書道の技能が必要」という記述につながったと言える。これらの記述から、「文字性」よりも「造形性」の部分に意識が働いていると言えるであろう。特に注目したいのが I に対する記述である。I は〔1 名・0 名〕であるが、選んだ理由として「この写真は絵のようで、幸せな家族を表している」と記述している。この記述は、作品の作者である上田桑鳩がこの作品で表現しようとした内容そのものである。林（2016）では日本人学生の少人数がこの作品を選んでいるが、その理由としては「品という字だと思う／形の変化で何か伝えようとしている／大きさや形の変化にどのような意図があるのか知りたい」といったものが挙げられたにとどまり、上田桑鳩がこの作品に込めた「家族」のイメージを想起した記述は見られなかった。上田桑鳩の作品から「家族」を感じ取ったこの留学生は、「品」という漢字を読もうとしたのではなく、その造形を見て何となく湧き出てきた感情を記述したのであろう。C、D、F、G、I の記述内容から、留学生の書への関わり方として、文字性だけにとらわれずに、造形性から書に触れ合えることの可能性が示唆される。

最後に、B、H、K について見ていく。これらの作品を選んだものは 0 名であった。B は 4

文字からなる楷書作品であるため、文字性の観点から選択する留学生がいると予想されたが、この4文字は楷書の中でも留学生が普段目にする「整った字形」の範疇には含まれない字形のため、文字性という点から選択されなかったと考えられる。Hについては、線や形の変化に富み、造形性の観点からの選択となると予想していたが、選択した者はいなかった。先述の造形性に着目したC、D、F、G、Iと比較すると、Hは文字性・造形性の両面を強く押し出す作品であり、留学生にとってこの作品をどのように解釈すればいいのかがわからなかったとも考えられる。Kは草行書作品であるが、変化に飛びすぎ、全体的な統一感を感じられにくい作品であった可能性があり、文字性・造形性の両面からも作品の捉え方が困難であった可能性がある。

以上、留学生の書道作品鑑賞に関して考察を行った。文字性の強いA、E、Jを選択したのは合計で11名、造形性の強いC、D、F、G、Iは9名であった。日本語学習をしている留学生であっても、書作品を見る際に文字性のみに影響されるのではなく、文字性と造形性の両面から見ていること、また見ることができる可能性を示すことができた。

## 5. まとめと今後の課題

書道体験のない留学生を対象に、1. 毛筆で漢字を書くこと、2. 書作品の鑑賞という2つの活動を通して、「毛筆で書くことと書字能力の向上の関連」「書表現の文字性と造形性の捉え方」について考察を行った。その結果、毛筆で漢字を書くことにより文字性についての意識が高まり、基本点画の書き方をはじめ、書字に必要な技能面の習得に意識が向けられることを明らかにできた。また、書作品の鑑賞からは、文字性と造形性の両面からの鑑賞が可能であることが提示できた。

しかし、本実践での収集データ数は非常に少なく、一般化には更なる調査が必要である。書表現の文字性と創造性については、日本語学習歴や漢字知識との関連もあると考えられるが、本実践からは明らかにできなかった。この点についても今後の課題としたい。

## おわりに

本実践に参加した全ての留学生が「機会があれば、また書道をしたい」と回答している。本実践を通しての感想の中には、「深い部分で日本の文化を感じることができた（英）」「上達するには忍耐が必要（英）」「書きたい文字を書くための練習を楽しめたし、そのことで私が書いた文字の意味が深まった（英）」等、書道を通して文化や書道の技能的な面の難しさを感じたり、自分が選んだ漢字を何度も練習することでその文字に対する思いがさらに深まったりしたという回答が見られた。書道が単に「楽しい」だけでなく、筆で文字を表現する

過程で様々なことを感じ取れていることもうかがえた。今後も留学生が書道を経験できる機会を設けていきたいと思う。

## 注

- 1) 高濱（1969）では日本に関する研究を行っている米国の高等教育機関を対象に調査を行っているが、回答では書教育が「日本語教育と中国語教育」の双方に位置づけられている機関があったため、「日本または中国」と記されている。
- 2) 説明は全て日本語と英語で書かれている。
- 3) 論文中には明記されていないが、実践内容の詳細から対象者は基本的に日本語未学習と考えらえる。
- 4) 例えば、左払いと右払いであれば「人」に使用されている等、参加者に考えさせたり、こちらから提示したりした。
- 5) これらの 11 作品の発表時期は昭和から平成であるため、著作権上の問題から本稿には掲載ができない。作品については、東京書籍『書道Ⅲ』（平成 16 年検定済・平成 18 年発行）の pp.48-51 を参照していただきたい。また、この 11 作品では林（2016）でも使用し、日本人学生と中国人留学生の書作品鑑賞の視点について比較を行っている。
- 6) 作品解説は、『書道Ⅲ』から引用したものである。
- 7) 上田桑鳩の『愛』と題される作品は 1951 年に発表され、書道界で注目を浴びた作品である。四角形や五角形に見えるものを 3 つ書いており、「品」という漢字にも読める作品となっている。上田自身は、この作品で「品」という字を書いたとは述べておらず、孫がハイハイするイメージを表現したとし、その理由から作品名も『愛』としたとしている。

## 引用参考文献

- 大阪外国語大学留学生日本語教育センター（2004）『留学生のための書道〈入門篇〉』
- 高濱武周（1996）「非漢字文化圏における「書」の教育目的 — アメリカ合衆国についての一考察 —」『書写書道教育研究』第 11 号、pp.76-89
- 田畑理恵（2013）「書道の表現における外国人留学生の文字性と造形性の捉え方」『書写書道教育研究』第 28 号、pp.44-49
- 林朝子（2016）「書作品を見る観点：日本人留学生と中国人留学生へのアンケート調査から」『三重大学教育学部紀要』第 67 号、pp.61-75
- 福光敬子（2005）「留学生にとって「書道」は？」『大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究』vol.3、pp.121-136



カレンダー作品と実践の様子